

工業高校におけるN I Eの役割 ～自立心と表現する力～

神戸村野工業高等学校

校長

吉田 耕造

教諭

江島 陽子

1. はじめに

平成28年度より、N I E実践指定校となったことで、どのように新聞を活用するのかを考える前に、まずは、授業そのものについて見直しをしてみた。

教師が授業の中で目指していることは何なのか。生徒は授業を通じて何を学ぶのか。これらの答えを明快に言えたなら、どれだけ気持ちがいいのだろう。しかし、教師経験の長さに反比例するかのように、その答えは単純明快にはいかなくなる。

社会が変われば求められる人間像も変わり、新しい環境で育った子供たちが、教師に求める内容も違ってくる。懐かしい匂いのする木の机が並んだ教室の、昔から何も変わらないような風景の中で、変化する世の中に対応しながら、私たちは手を替え品を替え子供たちに向き合っている。

N I Eを通じて、本校の生徒は果たして何を学ぶのだろうか。予測できないながらも、小さな成果を期待して取り組んでみた。

2. 本校の現状

本校は全校生徒、約1500名。1学年に12クラスあるうちの10クラスが工業科で2クラスが普通科である。

進路状況は、工業科が就職75%、進学25%。普通科が就職52%、進学48%である。(平成28年度卒業生)

このような高い就職実績により、本校の生

徒には卒業後の就職を意識して入学してくる生徒も多い。高校から大学へ進学し、それから将来を考えようとする子供たちと比べると、はるかに精神的自立心が高い生徒が多い学校であると私は感じている。

工業科の授業では、卒業後の進路に活かされるスキルとして行われる内容が多くある。私は国語を担当しているが、普通科の教科においても、「この課題は自分にとってどのように有益なのか」ということにこだわる生徒が多い。

一人一人違う「有益さ」の答えに、教師が真摯に向き合わなければ、生徒はそっぽを向いてしまうし、逆に納得すれば、生徒は一生懸命頑張る。自分の道は自分で決める。そんな自立心の高さゆえに、必要ないと思うことには、全く力を注がない。これが、典型的な本校の生徒の特徴であると思う。

入学時の学力という視点で見ると、本校の生徒は決して高くはない。精神的自立心の高さ、学力とのギャップを埋めることが、本校の生徒を伸ばしていくためには必要であると考えている。

3. 実践の概要

本校には、工業科（機械科、電気科、情報技術科、機械電子科）と普通科があり、教師から見た生徒観にもそれぞれ違いがある。どの科で実施するのかによって、授業内容も違

ってくると思うが、今年度は普通科 2 年生で実施することにした。

実践概要は以下の通りである。

○実践クラス

- ・普通科 2 年 A, B 組 (70 名)
(実践クラスを選んだ理由)
- ・普通科 2 年は、授業時間数が週 4 時間とゆとりがある。
- ・進路状況の割合が就職と進学でほぼ半数であり、いろいろな教材に柔軟に対応できると予想される。

○科目

- ・現代文 A

○実践目標

- ・新聞に親しむことで、社会に関心を持ち自分と社会をつなぐ目を養う。
- ・主体的に取り組むことにより、表現する力(話す、書く)を鍛える。

○実践内容

- ・新聞スクラップ (1 学期)
- ・山月記新聞 (2 学期)
- ・新聞記事発表メモ (3 学期)
- ・新聞記者派遣授業 (3 学期)

4. 実践報告 I 「新聞スクラップ」

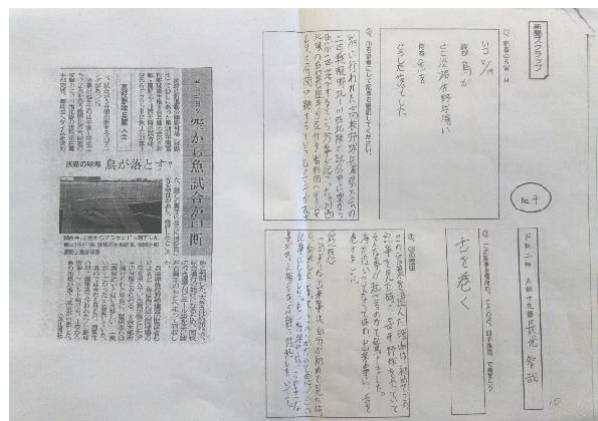
<授業の手順>

「新聞を 1 部ずつ配る。」⇒「自分の好きな記事を選び、切り取る」⇒「専用プリントに記事を貼る」⇒「プリントの設問に答えて完成」

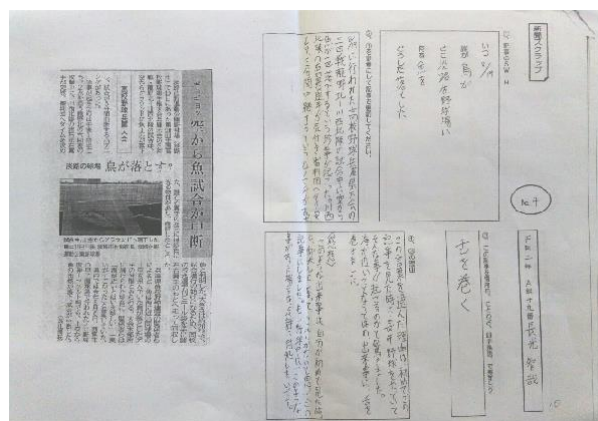
◎ 2 週間継続して行った。(全 8 時間)

<専用プリントの設問内容>

- ① 記事の 5W1H を抜き出す。
- ② ①を参考にして記事を要約する。
- ③ 選んだ記事を、慣用句 or ことわざ or 四字熟語で表す。
- ④ ③の理由&感想



「新聞スクラップ」



<留意点>

- ・能力に応じて全員が取り組めるように、設問内容(①~④)の難易度に変化をつけた。
- ・評価の基準を明確に伝え、それに応じて点数をつけた。

<感想>

- ・新聞を選び、切り抜く作業など、面倒に思う生徒が多いのではと思っていたが、全く逆で、ほとんどの生徒が新聞選びを主体的かつ意欲的に行っていた。自分で選ぶという行為が、学習を意欲的に向かわせる要因となった。
- ・自分の好きな記事がなければ、他者が持っている新聞から探し出すなど、好きに対するこだわりの強さを感じた。反面、自分には関係のないと思う世界に対しての関心の薄さも目立ち、そこを、どう開拓していくかが今後の課題であると思った。

実践報告Ⅱ 「山月記新聞」

＜授業内容＞

- ① 現代文 A の教材である「山月記」(中島敦)を学習する。
- ② 「山月記」の内容を、新聞風にまとめる。

＜新聞作成の手順＞ (全8時間)

- ① 先に新聞レイアウト枠を作ってしまう。
- ② 記事にする見出しを考える。
- ③ 記事を書く。



「山月記新聞」



＜展示会＞

- ・全員分を教室廊下に掲示し、投票を行い、賞を作った。
- ・クラスメイトだけでなく、多くの先生方にも投票して頂いた。

＜留意点＞

- ・作文が苦手な生徒のために、見出し例や、記事の例文は用意しておく。
- ・山月記の内容から大きく逸脱することだけは避けたが、生徒個人の発想を重視し、多少のアレンジは許容範囲とした。

＜感想＞

小説「山月記」は、難解な文章でどこまで全員が理解できるのかと懸念していたが、最終的に新聞を作って、さらには展示会も行うという目標を提示したことで、普段以上に、教材を読み込む生徒が多くいた。

また、普段はテストの成績が芳しくない生徒でも、文章の切り口が面白く、オリジナリティー溢れる表現で文を書く生徒がいたりして、教師側の発見もあった。

投票では、内容だけでなく、見た目の魅力点などで、普段、目立たない生徒でも票を集めることがあり、多くの生徒が自信につながったように思う。

実践報告Ⅲ ①「新聞記事発表メモ」 ②「新聞記者派遣授業」

「新聞記事発表メモ」(全4時間)

＜授業内容＞

- ① 各クラス発表者を決める(5～6名)
- ② 発表者は記事を選び、事前に内容をわかりやすくまとめ、発表する。
- ③ 聞く側の生徒は、用意された発表メモ用紙に、内容をまとめていく。

＜留意点＞

- ・発表者は内容を4～6項目に分ける。
- ・「聞く→頭で整理→書く」の「頭で整理」に重点を置くため、発表者は項目のみ板書し、

それ以外は口頭で説明する。

- 書かれたメモは、毎時間ごとに集め、評価する。



「記事発表の様子」

<感想>

- 両クラスとも発表者の立候補が5～6名あり、N I Eに前向きな姿勢が見られた。
- 聞く側も、発表者に質問を投げかけることが多く、しっかりとまとめたいという意識が感じられた。

「新聞記者派遣授業」

<実施内容>

日にち：平成29年1月26日（木）

講師：原龍太郎氏（共同通信社神戸支局）

テーマ：「新聞とは、新聞記者とは」

内容：共同通信社とは

活字離れ、新聞の役割について

新聞の読み方

新聞記者の仕事とは

<生徒の感想>

- 「伝えたいことを先に伝える」ということを学んだ。就職や大学受験の面接と同じように、自分がまず何を相手に伝えたいのかを新聞でもやっていると聞いて、なるほどと思った。
- 読んでいる人の身になって書かないといけないし、見出しが悪いと読む気にならないので難しそうだった。仕事はお金だけでなくやりがいや続けられるかを考えるのも大切だと学んだ。



「新聞記者派遣授業の様子」



5. まとめ

「1年間のN I E授業を終えて、ここまで生徒達が前向きに取り組んでくれるとは思わなかった。」

これが私の率直な感想である。

表面的な学力に隠れた生徒の持つ力は予想以上であった。押し付けられることを嫌い、必要ではないと思うことには力を注がない。その結果、受験対策主流の学力習得には遅れを取ってしまっている。しかし、自立心に基づいた探求心・向上心は、決して錆びつくことなく、生徒の心の中に生き生きと活気づいているのだと思った。

N I E授業は、そんな生徒たちの力を表面に導く突破口となるのかもしれない。来年度は、さらにこの秘めた力が発揮され、そして学力全体が伸びていくような成果を期待して、取り組んでいきたいと思った。